

# 平成一九年度東亜同文書院記念基金会 記念賞推薦のことば・受賞挨拶

平成二〇年一月二九日、霞が関コモンゲート西館  
三七階の霞山会館において、東亜同文書院記念基金  
会授賞式が行なわれました。第一四回の記念賞受賞  
者は東亜同文書院四三期・愛知大学卒業の浅川義  
基氏です。

徳井清太郎氏の推薦人のご挨拶と推薦理由は直  
筆の原稿で掲載させていただき、続いて浅川氏の受  
賞の挨拶文を掲載させていただきます。

只今ご指名を頂きまゝた推薦者の  
徳井清太郎であります

浅川君とは、伊友43期として同期の  
仲であります。今日の浅川義基君の  
記念賞受賞は同期生にとりまゝても  
大いなる名誉であり喜びであります

これを機会に浅川君にお願いしたいこ  
とはどうかこれまでの知識・経験を生  
かして日中友好と国際親善の更なる進展  
のためにスポーツを通して大いに尽力して  
ほしいと思います

それではここで改めて推薦理由を述べ  
させていただきます



授賞式の様子

### 推薦理由

浅川義基君は日本選手団の一員として、北京国際元老テニス大会に連続二十年出場する中で、会の推進的役割を果し、金メダルの獲得により日本の名誉を高揚し、これを基盤として、中国政府党の最高幹部・北京市国際体育交流中心・北京八十不老テニスクラブの面々・中国少年等との交流を深め、日中友好と国際親善のために尽力した。

この実績は、「書院建学の精神」を継承し、発揚した結果であり、記念基金会員則第三条に適合するものである。

## 記念賞受賞の挨拶

浅川 義基

本日はご挨拶かたがたご報告いたしたいと思います。まず自己紹介をいたします。

私は東亜同文書院四三期生として、昭和一八年一二月、内地学生同様、学徒出陣を命ぜられ、現地入隊しました。初年兵教育後、南京予備士官学校へ入学、同校の第一中隊は書院の四一、四二、四三期生がほとんどを占めておりました。士官学校卒業後、見習士官を経て陸軍少尉任官、蘇州郊外駐屯部隊小隊長を務めておりましたときに終戦となり、学半ばにして帰国し、愛知大学学部二年に転入学いたしました。昭和二十四年旧制経済学部を二期生として卒業。对中国経済分野での活躍を希望し、商社に入社しました。大正一二年生まれ、今年八五歳になります。

昭和二九年、今から五四年前ですが、日本政府は貿易再開を宣言し、商社、マスコミ、船会社社員にパスポートを交付しました。さつそく申請し、中国大陸に最も近い香港駐在の為、米軍管理の羽田空港よりBOACプロペラ機で九時間かかって香港に到着いたしました。当時の日記を見ますと、五五人乗りのプロペラ機に乗客は一五名のみ、のんびりした空の旅を楽しみました。

香港に着きまして、地場取引をしたのみならず、中国情報入手の為に中国政府の出先機関である華潤公司を頻繁に訪問し、土産物の買付、機械類の売込に成功しました。その後、韓国の李承晩大統領は日本の商品

を一切輸入禁止にしましたので、香港經由韓国向け取引が活発になり多忙を極めました。日本の本社からは香港を訪れる取引先幹部の接待指示がテレックスで次々入ってくる、朝から夕まで客先を廻り、夜は宴会が二つ三つ重なる始末、これでは体がもたないと考え、書院硬式庭球部出身であることを思い出し、短い時間でもテニスをして体を鍛えました。テニスには三〇〇四〇分あれば充分汗がかけるというメリットがあります。单身駐在の場合、優秀なクラークを採用することが重要です。私も单身赴任でありましたが、幸いにも書院二八期生の福建省出身の羅振麟先輩の息子さんが香港に在籍という情報をキャッチし、英語も堪能な優秀な青年でしたので彼にクラークを頼み、二人三脚で業務を推進できました。書院出身のメリットでありました。その後、支店を開設し、国内からと現地とスタッフも充実し、三年駐在して帰国いたしました。

帰国後、中国大陸への入国を狙っておりまして、中古の大型タゲボートの買付団が来日し、入札に参加しました。幸いにも三隻の中古船を契約できましたので、現地引渡しのため、天津港、上海港、広州港に出張の機会ができました。文革最後の時期に経験したことは次のようなことです。

まず、香港から国境を歩いて渡り、深圳から広州まで汽車に乗ったわけですが、車中では大きな声で「批林、批孔」と宣伝している。「林彪を批判せよ、孔子を批判せよ」この宣伝を盛んにやっている。それから、広州駅のホームの着きますと出迎えの人が待っていて北京まで案内してくれる。えらい親切だなと思つたところが、この方は公安の方で私の行動をチェックするために北京まで付いてきた、ということが後で分かりました。北京に着いた夜は暗くて外に出ない、することがないと申しましたら、毛沢東語録を渡されましてこれを勉強しなさいと、そんなものできるかと言おうと思いましたが、黙って受け取りました。帰りは

広州に寄りまして、朝ウォーキングで公園へ行きますと、坂のところに石が積んであり、よく見ると石には字が彫ってある。墓石なんです。墓石も全部壊して階段として利用されている。恐る恐る上りました。

一九八〇年代に入りますと鄧小平が復活し、改革開放政策をとります。彼は国賓として日本へ来た時に、新日鉄と松下の工場を見学して驚いたわけです。それで彼が言ったのが白猫黒猫論。白猫でも黒猫でも鼠をよく捕るのがよい猫だ、つまり社会主義でも資本主義でも経済が成長し民度が上がればいい、と言いました。そして先富論、可能な者から豊になれ、少しの人民でも裕福になれば後は付いてくる。この二つの理論をもつて鄧小平は改革開放を大胆に進めました。その結果、私も経済交流と体育交流、両方面の交流と架け橋の仕事ができるようになったわけです。

経済交流をみますと、まず北京にビルメンテナンスの合弁会社をつくるという話です。これも書院四二期の日下部先輩が日本航空の北京乗入れのために長期滞在しておられて、北京市政府から北京には新しいビルはどんどん建つが、その後のメンテナンスのノウハウがない、日本の合弁会社をやってくれないか、という話でやることになったので君も参加しないかと声を掛けていただき、この合弁会社の事業に参加しました。この新会社の副総経理を一三年に亘ってやりましたので、この間いろいろな交流ができるようになりました。

このプロジェクトの成功した理由は、まず、日本のビル管理の会社のトップが中国へ興味を持ち、どんどん先行投資をしたこと。二番目には、技術供与というのは日本の技術者が中国へ行つて教える方法と、向こうから研修生を呼んで教えるのと二つありますが、現場の仕事が多い場合は研修生を日本に呼んだ方が良くと私が提案し、一年に二〇名ずつ六ヶ月から一〇ヶ月実地研修させて帰した。五年間続けたので一〇〇名の

研修生が帰国し各現場の責任者となり、うまくいきました。この経験を基として上海や、蘇州でも同じように合弁会社をつくり成功いたしました。

そのプロジェクトの副総経理として春と秋二回の役員会議への出席、一〇月の終わりには国際元老テニス大会と年に三回、定期的に中国へ行く機会がありましたので、両プロジェクトの相乗効果によって、二〇年に亘り日中交流と架け橋の仕事を実施可能となったのです。

現在の役職

- 一、北京国際体育交流中心顧問
- 二、北京体育総会国際交流部名誉会員
- 三、日中友好九人委員会委員
- 四、北京三幸物業管理(有)顧問
- 五、明治神宮外苑テニスクラブ大正会会長
- 六、日本シニアテニス連盟名誉理事

以上のなかで日中友好九人委員会について一言ご連絡したいことがあります。

この委員会は一年おきに日中関係シンポジウムをやっており、本年は第四回目で一月に愛知大学において開催する予定でおります。経緯を申し上げますと、この日中友好九人委員会というのは書院四四期の秋岡君が創設者で代表者です。彼は朝日新聞特派員で文革中に北京に駐在しました。他の新聞社の特派員は全

部追い帰されましたが彼はずっと駐在しておりました。そのため現在は「人民日報」海外版の在日本印刷発売権を持っています。この委員会は学術、報道、経済、文化、音楽、体育、その他、各界の長年に亘る日中関係貢献者がメンバーになっています。

この名前は中国語発音で99 〓久久（チュウチュウ）、永く続くようにという意味もあります。資金の裏付けもなく、単なる任意団体と思っておりましたが、王毅前大使が熱心で、一昨年九九人委員会全員を大使館に招き、これからも民間のベースで日中関係を深めるよう尽力願いたいと、盛大なパーティーを開きました。大使が招待会を開催したということは、中国政府が認めた団体であると確認できたのです。

中国側の相手はどこかといいますと、外務省の外郭団体で国際友人研究会という、外務大臣を辞めた方や各国の大使をされている立派な方々が相手に、その座長の楊振亜元駐日大使（勲一等を受章しておられ、私も以前に交流があります）から二年前に私に相談がありました。次期シンポジウムを東京以外の場所で行かないかと。そこで私は現代中国学部もあり、中国研究も進んでいてシンポジウムの設備も揃っている愛知大学をぜひ利用して下さいと提案しました。二年前の霞山会賀詞交換会の日に愛大学長に基本的承認を得ました。そういうことで、今年のシンポジウムは一月に愛知大学で行なわれます。

## 一、第一回北京国際元老テニス大会に参加した経緯と二一年間連続出場の原因

一九八五年書院硬式庭球部三二期雨宮先輩より「来年度から北京国際元老テニス大会が開催されるので、



元老テニス大会出場

君も参加しないか、パートナーは同じ硬式庭球部三三期近藤君を推薦する」とご連絡がありまして、一九八六年第一回大会に近藤先輩とペアを組んで米国の強敵と対戦し、8-8のタイブレークに持ち込み、最後に敗れましたが、その後の参加への自信を得ました。

それ以降二一年間連続参加し、日中交流、架け橋を果たし得たのは、書院硬式庭球部の諸先輩の全面的ご指導と励ましに依る結果であり、その過程に於いて困難に遭遇した際は常に書院建学の精神を思い出して克服したものと思っております。

直接ご指導を頂いた先輩の方々は久重福三郎先生（一六期・書院教授・戦後、神戸外語大教授）、雨宮治良先輩（三二期）近藤敏三郎先輩（三三期）、佐原元一先輩（三五期）、藤田照男先輩（三六期）、村岡正三先輩（三六期）、深水邦基先輩（四〇期）の方々です。

特に申し上げたいのは久重先生で書院の一六期です。学生時代、対外試合に活躍され、卒業後、再び学校に復帰され、硬式庭球部の部長でご指導いただきました。その後ハーバード大学へ研究に行かれて、帰って来られて書院で教授をされ、その時テニスの指導は全部久重先生がなさっていました。戦後、引き揚げてからは神戸外語大学の教授になられまして、やはりテニスの指導をされていました。芦屋のグラウンドベテランテニス大会でも優勝されています。東京へ来られますと硬式庭球部の同窓を集めて指導していただいた、一番の大先輩でございます。



## 二、第二回大会までの経過

### 二一 一九八九年天安門事件後の大会

BOA放送や香港情報は天安門広場で二〇〇〇人死亡したと報道したので、世界各国より参加申込があるわけがない。たまたま私は同年八月、北京経由で瀋陽へ一週間出張する機会があったので北京では情報収集や現場を検証した結果、天安門広場で一人も殺されていないということが分かりました。学生達を追い払うために上向き発砲、空砲だったと。もちろん、その他の場所では死傷者三一九名と正式に北京市長が公表し

ております。それなら参加しようと決意し、申し込みましたが、私を含めて日本より五名のみでした。他は一二ヶ国の大使館員から参加者を集め大会を行ないました。主催者の張総経理は「あなた方五名が来てくれた大会が開催できました。この恩は一生忘れません」と涙ぐんでいました。

### 二二 第一〇回記念大会の祝辞

一九九六年一〇回記念大会宴会で張総経理の要請があり、一〇年連続参加した者として祝辞を述べました。北京飯店の大会場で中国語で英語の通訳付きの祝辞は、拍手喝采を受けました。



第10回記念大会

祝辞の要旨は

一、初めから一〇年連続出場は考えず、翌年も来ると約束した事を思い出し、それを毎年履行した。  
二、毎年、同じ時期（一〇月末）、同じ場所（北京）に来て、史上初めて行なっている社会主義市場経済の実情に接し、驚きと称賛の眼で検証する楽しみがあった。

三、七三歳だった当時、七年後に八〇歳になったとき北京の八〇不老テニスチームと対戦したい。これは可能だと思っておりました。何となれば、前年テニスが終わってから主催者側は山東省の名山である泰山に案内してくれました。泰山の頂上を極めたものは寿命が一〇年延びると聞きましたので、必ずできると思っております。

この祝辞は自分で中国語の辞書を引きながら作り、その後、四四期生の陳弘先生に添削をお願いすると、真っ赤になって返ってきました。おかげで名文の中国語になりました。陳弘先生は、戦後は人民日報の東京特派員、帰国後は中日友好協会などの理事をされており、第四回基金賞を受賞されています。毎年中国へ行った際にはお会いし、食事をしながら情報交換をして二〇年交流を続けています。

## 二一三 第一九回大会の優勝と第二〇回記念大会

二〇〇五年一九回大会で八〇歳ブロック優勝、金メダルを受賞しまし



第19回大会優勝

た。

理由としては

一、日本より八〇歳以上の参加者がなく、中央民族大学のテニスの上手な球友朴時英教授がパートナーだったこと。

二、それまでの参加経験が長く、大会に慣れている。

三、近藤先輩の遺訓「八〇過ぎて、テニスをやりたければ足を鍛えよ」を実行していたこと。

二〇〇六年二〇周年記念大会には二〇年連続参加貢献賞ナンバーワンを受賞いたしました。

### 三、日中交流の実績

以上のテニスを交流の手段として、上は政府、党の最高幹部と、下は一中国少年との交流まで行なうことができました。

#### 三―一 中国政府、党の最高幹部との交流

VIPグループがありまして、私も日本の団長と共に参加いたしました。VIPの方々は鄧小平時代の方里副首相、呉邦国全人代常務委員長、李瑞環全国政協会議主席、李鉄映文部大臣などで、当初はSPに囲まれ登場して試合が終わればすぐに帰るようなことで、話す機会もありませんでしたが、五、六年しますと、



李瑞環氏と

顔を覚えていただき声をかけてもらうようになりました。

この中で万里副首相とよく交流しました。訪米した際はブッシュ元大統領（父）とテニスをし、ブッシュ氏が中国へ来ると一緒にテニスをする、とおっしゃっていました。この新霞山会館の入り口に一九八三年に人民大会堂での万里副首相と近衛会長の写真がありまして拝見しました。その三年後に万里副首相と会ったので、写真を見ていればその話もできたのと思いました。

李瑞環閣下は非常に熱心であり、準国賓待遇で来日した際は、私が大正会会長をやっております神宮外苑テニスクラブを紹介しました。名実共に日本最高のクラブで、施設も充実し、八面ある室内コートは雨でも夜でも利用できる。東京滞在中は公務終了後、夜間室内コートで二晩ともプレーされて感謝されました。

### 三二 北京市国際体育交流中心との交流

第一回大会より一〇年出場し、国際試合に相応したルール、エチケットを助言してきました。そのため正式顧問に要請され、第一回大会より就任いたしました。まず、この大会をITF（国際テニス連盟）の公認試合にすることを提案し、川延ITF副会長に交渉して公認され、一九九四年よりITF公認大会となり

ました。

もう一つ、元老ゴルフ大会の開催を提案し、二〇〇〇年に霞山会、近衛会長に団長になっていただき、愛大同窓の中島君が幹事役で行きました。中国側はゴルフ協会会長や元大臣、次官クラスといったそうそうたるメンバーでありましたが、平素は秘書官等とプレーをしております関係上、ルールやエチケットの違反が多いと日本側参加者から大分文句を言われました。近衛会長にお聞きしましたら「中国とは一〇年はゴルフできません」と笑っておられました。五年後に六ヶ国が参加した元老ゴルフ大会を開催しましたが、日本の参加者に聞くと、「今回はそんなことはなかった」ということで、解消したなと感じた次第です。

### 三―三 「北京八十不老テニスクラブ」との交流および架け橋プロジェクト

一九九二年に中国では八〇歳以上の政府や党の旧高級幹部、老將軍を会員として上記クラブが発足しました。一方、日本シニア連盟を鈴木会長が私財を提供し設立し、国際シニア親善テニス大会を開催し、滞在費は主催者負担なので各国から多数参加するようになりました。ところが日本テニス協会から横槍が入り私へ連絡がありました。国際大会は認めない、協会が主催者にならないシニア連盟の国際大会の仕事から手を引けと。私は日中関係の仕事を長くやってきており、今回も中国側招待の手伝いからは手は引きませんとはっきりと断りました。

八十不老会長の何純渤先生（元電気省次官 現九〇歳）と長い時間交渉して、北京八十不老テニスクラブは第一回に参加し、その後隔年参加しています。私は不老チームが参加するときの滞日中のアテンドを鈴木

会長より依頼され、毎回中国チームの面倒をみて  
おります。

二〇〇〇年五月、何純渤会長は返礼として、鈴木会長と秘書の女性と私の三名を北京へ特別招待して、親善試合をして、接待の限りを尽していただきました。

### 三―四 中国少年との交流

一九九三年一〇月、テニスの試合終了後、天安門広場を見学していたとき、ハルピンから来ていた三、四才の男の子と出会い、撮った写真を送った為、交流ができました。その坊やは「日本のおじいちゃんに会いたい」と寝言まで言うようになり、お父さんはそれなら北京へ連れて行ってやれとお母さんに言ったそうです。まさか来ないだろうと思っていましたが、翌年、夜行列車に乗って北京まで応援に来てくれました。二、三年に一度は応援に来てくれるようになり、その子に一度ハルピンに来てくれと言われました。「その内に」と約束したままになり、いつまでも不実行はいけないと考え、二〇〇四年六月、家内同伴でハルピンに行っていました。元共産党幹部の婦人のお祖母さんにもお会いしましたが、立派なご家庭でした。その後、二〇〇五年の第一九回大会優勝戦に立ち会って応援してくれ、既に身長一七五センチになり、ラケットを持参していて二人で打ち合いテニスを楽しみました。本年、大学へ入学しました。



中国少年との交流

小学生時代は共産党青年団本部発行の全国新聞「中国少年報」に、中学生時代には、同「中国中学生報」に、ハルピン行った際には「ハルピン新晚報」に新聞報道されました。本大会「二〇周年記念誌」の友誼篇に二頁に亘りこの件が掲載されました。

以上で報告を終わります。

最後に愛大学生卒業生に特にお願ひしたいことは、書院の建学の理念である、日中交流の架け橋となる人材を養成するという精神を継承され、愛知大学の学生、卒業生が活躍されることを願ひまして私の挨拶とさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

